

Title	清代の琉球漂流民送還体制について：乾隆二十五年の山陽西表船の漂着事例を中心に
Author(s)	赤嶺, 守
Citation	東洋史研究 (1999), 58(3): 502-527
Issue Date	1999-12-31
URL	http://dx.doi.org/10.14989/155265
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

清代の琉球漂流民送還體制について

——乾隆二十五年(1760)の山陽西表船の漂着事例を中心に——

赤 嶺 守

はじめに

清代における琉球船隻の中國沿岸への漂着に關しては、進貢船・接貢船(進貢使節の迎接船)・護送船(中國人漂流民の送還船)そして一般船隻等の事例を確認することができる。本稿では、そうした漂着事例の中で一般船隻の漂流について、特に乾隆期の漂流民送還體制について検討する。

清代の一般船隻の中國への漂着については、これまでの先行研究で順治年間から同治年間にかけて『清實錄』『歷代寶案』『中山世譜』等の漂流記載により三二四件の漂着(乗船者數合計五四七〇人、死亡者數合計六六〇人)が確認されている。⁽¹⁾光緒年間の一一般船隻の漂流については、『歷代寶案』『中山世譜』では知り得ないが、『德宗實錄』や沿岸各省の總督・巡撫が漂流民の撫恤・送還について報告した奏摺や題本といった「檔案」類で光緒二十四(一八九八)年までの漂着事例を大方把握することができる。その數を併せると漂着件數はさらに増え、清代にかなりの漂着船が中國沿岸に漂着したことがわかる。⁽²⁾琉球漂流民の漂着件數は浙江省・福建省(臺灣府を含む)の二省が最も多く江蘇省・山東省・廣東省と續き、漂着はほぼ中國沿岸各省に及んでいる。

近世の東アジアにおける漂流民送還體制について、荒野泰典氏は「近世東アジアにおいて漂流民の送還が體制的に成立

するためには、つぎの二點が必要であつた。第一に、各國の海禁政策による對外關係の國家的獨占の成立、第二に、漂流民送還のルートとなる何らかの國際關係の設定である。これらの二つの條件を満たして、東アジア全體に漂流民送還體制が確立するのは、一八世紀に入ってからのことである。一八世紀の東アジアは、一六〇一七世紀の動亂を経て、各國が海禁政策をとりながら相互に恆常的な關係を結ぶことによって、相對的な安定期に入つたといつてよく、この時期に定着した關係は近代直前まで維持される」と述べ、一八世紀に東アジア全體の漂流民送還體制の確立したことを指摘している。⁽³⁾

中國における琉球漂流民の送還に關しては、その體制的確立をより早い時期に求めることができる。琉球は明の洪武五(一三七二)年に、太祖洪武帝の招諭を受け、中山王察度が弟の泰期を進貢使節として派遣し入貢して以來、中國との間に進貢關係が成立しており、萬曆二十二(一五九四)年に「浙江省温州府」に漂着した漂流民を福建巡撫が漳州人阮國を派遣して護送歸國させ、⁽⁴⁾泰昌元(一六二〇)年には「廣東省瓊雷貳州界處」に漂着した漂流民三十三人を進貢船で附搭歸國させるといった事例を『歷代寶案』で確認することができる。進貢使節の起居および附搭貨物による進貢貿易の據點として機能していた福州琉球館(柔遠驛)のあつた福州からの送還ルートは明代に既に確立しており、また崇禎六(一六三三)年の福建省福清縣海壇地方に漂着した漂流民に對して、福州に解送されてきた日から毎日、全員に米一升五合・蔬菜銀五釐・柴薪銀一釐を支給し、さらに衣被銀二錢が與えられ、歸國の日まで福州琉球館に安插(安頓)するといった措置がとられている。⁽⁶⁾このように琉球漂流民に對する撫恤・送還については明代に既に成例化されていた。清代の福州における撫恤は、乾隆期の『戸部則例』で停泊の日に毎日口糧米一升、鹽菜銀六釐、歸國に際して一ヶ月の行糧、さらに加賞として布四疋、綿花四斤、茶葉一斤、灰麵一斤、生烟一斤、每四〇名に猪二口、羊二羣、酒二埕と規定され、⁽⁷⁾沿岸各地に漂着した漂流民は一部の特殊事例を除いて、原船が損壞せず自力回航が可能な場合でも漂流者は全て福州に護送され送還されている。清代の琉球漂流民の送還體制は、基本的に明代の送還システムを繼承したものと理解していいだろう。

清代初期、漂流民に對する撫恤銀兩の支出に關しては安定した財源の確保がなされておらず、康熙五十九(一七二〇)年

に臺灣に漂着した永良部商人仲治等の鹽菜銀の撫恤銀兩を「地丁銀」から、加賞を「俸工」の項目から支給し、雍正四(8)
 (一七二六)年の漂流民平得等の送還に關わる漂流船の修復費用を雍正二年以前の「舊欠耗羨」に求めている。(9)
 六月に順天西表首里大屋子等三十六人(寧波府定海縣)、同年八月に新垣等十人(寧波府象山縣)と續けて二隻の漂流船が漂
 着した浙江省では、その撫恤への對應策として布政使の張若震が九月二十六日附けで、以後各省における撫恤銀兩に關し
 て「存公銀」項目からの「動用(支出)」の許可(成例化)を請う上奏をおこない、(10)その上奏に對し閏九月十五日に以下の
 上諭が下されている。

朕思うに、沿海地方、常に外國船隻の風に遭ひ飄ひて境内に至る者あり、朕、抱與するを懷と爲し、内外並えて岐視
 する無し。外邦の民人既に中華に到るに、豈一夫をして所を失はしむる可けんや。嗣後、如し此の似き漂泊の船有ら
 ば、該督撫に著して有司を率し、加意撫恤し、存公の銀兩を動用し、衣糧を賞給し、舟楫を修理し、並びに貨物を將
 て査還し、本國に歸還せしめ、以て朕が遠人を懷柔するの至意を示すべし、此を將て著して永く例と爲さしめよ。(11)

この上諭は沿岸各省の督撫に通達され、以後漂流民の撫恤に關しては「存公銀」の支出が認められ支出財源が確保され
 る中で、送還システムの體系的な整備が進められている。

さて、本稿で取り上げる乾隆二十五年の山陽西表船の漂着事例は時期的には送還システム整備化の過渡期ではあるが、
 山陽西表船の漂着に關しては、漂流から歸國に至るまでの撫恤・送還過程を知りうる題本・奏摺・咨文・詳文・呈文・稟
 文といった行政文書が比較的多く残っていることから、以下そうした文書を通して、清代乾隆期を中心に漂流民送還制度
 を概観してみることとする。

一 乾隆二十五年(1760)の山陽西表船の漂着事例について

1 琉球漂流民に關する時代的背景

漂流民は檔案のなかでは「遭風難番」「遭風難夷」「遭風難人」「遭風番人」「遭風洋人」として出てくるが、清代における琉球漂流民の漂着に關しては若干複雑な事情があつた。

周知の通り、一六〇九年の薩摩の琉球侵攻以降、琉球は幕藩體制國家の中に編成された異國(薩摩の附庸國)として位置づけられており、琉球を支配下においた島津氏は、清朝に對する附庸國支配の實態をかくす隱蔽政策を進める中で、琉球の進貢貿易を介して必要とする唐物をえていた。『薩州船清國漂流談』(一七四一〜四二〔寛保一〜二〕)によると、寛保元年七月、薩摩廻船が琉球での貢租取立ての途次、久米島沖で遭難し、漂流民二十人が途中「端船」に乗り移り浙江省舟山列島の漁山に漂着している。薩摩廻船は船頭が病死し、水主二人が患つたため、琉球で水主の金城と吳屋を雇い入れていたことから、漂着後「右の島、唐國の内と存じ候に付き、琉球にて雇ひ候水主兩人、庖丁にて髪を切り、日本人の體に仕り、名も(金城を)金右衛門、(吳屋を)五右衛門と改め、唐國にては右の名を申し候」と琉球人水主の月代を剃り、名前を日本名に改め日本人風に仕立てている。また「琉球より荷物積み來る船の由は、唐國にては申さず候⁽¹²⁾」と、琉球支配の事實をひた隠しにする隱蔽策に徹している。この琉球人水主二人は日本人漂流民として、翌年五月に乍浦より長崎に歸港している。この隱蔽策に關して同『漂流談』ではさらに「薩摩より琉球へ渡船人數不足候へば、いつとても琉球人雇ひ乗せ候義、毎度御座候、萬一唐國へ漂着仕り候節、日本船え乗組み候義、琉球國にて法度にて御座候、琉球人雇ひ乗せ候節は、若し唐國へ漂着候はゞ、日本人の體に仕る筈に、兼て書付を、琉球の役所へ差出し置き申し候、勿論薩摩にても、右の通り申し付け御座候」と記述している。⁽¹³⁾ 乾隆二十二年、中國が再び海禁政策に踏み切ると、こうした隱蔽政策はさらに強化

されている。

また、薩摩の附庸國支配が進貢體制に支障をきたすことを恐れた王府側も十八世紀後半、「旅行心得之條々」第一部（乾隆十八年）・第二部（乾隆二十四年）「冠船渡來に付締方書渡候覺」（乾隆二十一年）「唐漂着船心得」（乾隆二十七年）「御領國之船唐漂着之儀ニ付取締方」（乾隆五十年）といった薩摩との關係をことごとく否定するよう指示した令達や心得を出している。⁽¹⁴⁾「旅行心得之條々」には「唐江漂着之時晴様（辯明）之條々」の十二項目が記され、その中で書狀や帳簿類など中國側に見られると都合の悪いものは早々に焼き捨てるなど、入念に處理するよう指示している。⁽¹⁵⁾また「唐漂着船心得」（乾隆二十七年壬午）では乾隆二十六年に江蘇省寶山縣に漂着した照屋等二十一人の隨帶帳簿・大和（日本）書籍・呪文・書信等が福州で一時取り上げられ、書籍類が照抄され江蘇巡撫に咨送されたことから、以後中國「官人」に「通手形」や「諸書付」の類の日本年號や御國衆（薩摩藩士）の人名を見られると、こと難題に及びかねないので、そうした年號や人名は全て假名に改めるよう、そして大和書籍や案書の類は漂着後、速やかに焼き捨てるよう命じている。⁽¹⁶⁾

琉球船隻は航行の際に「船主」「船頭」「水主」「積荷種類・數量」「渡航目的」が記載されていた津口手形の携帶を義務づけられ、中國沿岸に漂着した漂流船隻も津口手形を携帶していたはずであるが、そうした令達が出された後、漂流民は津口手形を自らの國籍・身分を明らかにする證として中國側へ提示することを避け、檔案では「牌照無し」とする記述が多くなる。そうした薩摩との關係を隱蔽しようとする琉球漂流民の漂着時の行爲は、小林茂文氏の「漂流と日本人」の中の「漂流民の多くは、漂流地點に上陸するときや、外國船に救助されたとき、船玉とともに浦賀番所の切手や往來手形を首にかけて持ち、命の次に大切にして船を離れる。これらは唯一の身分證明書であった」とする日本人漂流民とは全く異なる。⁽¹⁷⁾

乾隆二十五年の山陽西表船は、中國が再び海禁政策にふみきり、こうした薩摩側・王府側ともに隱蔽政策が強化された時期に廣東省潮陽縣に漂着している。

2 山陽西表船の漂着

乾隆二十四年五月十日に王府に交納する糧米を積んで太平山（宮古）を出航した山陽西表船の乗組員山陽西表等三十七人は交納を済ませた後、那覇で新桅・鐵釘・藥材・茶葉・鹽・糖等を購入して、同年十二月九日に太平山へ向け歸帆している。途次、同月十二日「颶風」に遭い約二十日閒東シナ海を漂流し續け、翌二十五年一月二日に廣東省潮陽縣に漂着し、營汛の救援をうけ内港に牽入されている。同月十三日船内で水主の高江洌が病故したことから、遺骸を現地で埋葬し、残る三十六人は潮陽縣にて「口糧錢米」の給發をうけ、存公銀による船の修復をしている。三ヶ月後の四月五日に營船に護送されて福州に向け潮陽縣を出航し、五月六日に福建閩江の亭頭に到着、十一日には南臺に至り福州琉球館に送り届けられている。⁽¹⁸⁾當時福州琉球館には、上京使節を迎えるため派遣されていた接貢船の乗組員以外に、前年（乾隆二十四）閏六月に浙江省台州府臨海縣に漂着した全任之等四十一名、同年七月に浙江省温州府坎門に漂着した照屋等十三名、同年七月に江蘇省淮安府阜寧縣に漂着した大嶺筑登之青雲上等八人の計六十二人が漂流地から護送されてきていた。⁽¹⁹⁾大嶺筑登之青雲上の船は江蘇省で損壞漂失、全任之船・照屋船は無事福州に護送されてきていたが、二隻とも遠途航海には不適で、また接貢船にて附搭歸國するには人數が多すぎたことから、全任之船・照屋船二船を解體して新たに海船一隻を造り上げる作業が行われていた。⁽²⁰⁾山陽西表等の福州琉球館到着の五日後（五月十六日）には、さらに乾隆二十五年一月に廣東省香山縣に漂着した麻支宮良等四十六人が損壞した漂流船を賣却し護送されてきている。⁽²¹⁾山陽西表等の福州滞在中、さらに嘉手川等三人の漂流民が加わり、合計百四十七人もの漂流民が福州琉球館で起居を共にしている。こうした漂流民の送還に關しては全任之・照屋等の新造船の完成、山陽西表船の修復を待つて、接貢船と併せて三隻に分乗して歸國することになり、修復を終えた山陽西表船には八月九日に廣東省香山縣から護送されてきた麻支宮良等四十六人の内二十八人が乗り込み、八月二十七日に閩安鎮で附搭人員・貨物の驗明を受け、その後兵船に護送されて浙江省温州中營三盤洋面に北上、

風待ちをして十一月十七日に全任之・照屋等の新造船と共に「出洋」し歸國の途に就いている。しかし途中「颶風」に遭い船が座礁し船底に遺漏があったことから、十二月五日再び福州に回航し船を修復している。⁽²²⁾二度目の福州滞在中、同年十二月十六日に福建省連江縣定海に漂着した黒嶋首里大屋子等四十二名(黒嶋首里大屋子船)、さらに十月十二日に廣東省香山縣に漂着した大城等十七人(大城船)が、それぞれ翌二十六年一月八日、三月十五日に福州に護送されてきている。大城船は朽爛を理由に廣州で賣却していたため、大城等十七人は黒嶋首里大屋子船にて附搭歸國することになり、黒嶋首里大屋子船・山陽西表船は修復完了後、閩安鎮での驗明を受け七月二十日「開駕出口」している。しかし黒嶋首里大屋子船は「風汎」不順で歸航に失敗して浙江省玉環縣に再漂着し、この二次漂流に關しては福州に戻されることなく、八月十六日に浙江海域にて再「出洋」し、九月に琉球に到着している。⁽²³⁾先に「出洋」した山陽西表船は遅れて十月に歸國している。⁽²⁴⁾

山陽西表船は乾隆二十五年一月二日に廣東省潮陽縣に漂着してから、送還されるまで實に一年七ヶ月もの月日を費やしている。

二 福州における行政文書の收發経路

江蘇省・浙江省・廣東省等沿岸各省に漂着した琉球漂流民は、漂流船が修復され歸帆航海が可能な場合でも全て福州に護送され、福州は琉球漂流民の送還據點となっていた。漂流民は歸國のため「登舟」するまでの間、福州琉球館での起居待機が義務づけられ勝手な移動は許されていない。また分乗できる漂着船がなく進貢船・接貢船の到着を待つて送還される場合、一年以上も福州で待機しなければならないケースもある。さらに福州には中國沿岸各省から琉球漂流民が護送されてくる以外に、朝鮮や安南・呂宋からも中國を經由して送還される琉球漂流民が送られてくるなど、福州は東アジアにおける琉球漂流民送還のターミナル的存在であった。福州では琉球漂流民に對してどのような行政的な撫恤處理がなされ、また中央(皇帝・六部)へはどのように報告されていたのか、山陽西表船の撫恤・送還に關する福州における報告文

書の收發過程を中心に以下検討してみることにする。

1 存公銀の「動用」に関わる文書

山陽西表等三十六人は潮陽縣から營船に護送され、閩江を遡上し乾隆二十五年五月六日に亭頭に到着、泊している。この山陽西表船の亭頭到着については五月八日に福州府海防同知（以下「福防同知」と略す）から福州將軍に呈文で報告されている。⁽²⁵⁾ 船はその後十一日に南臺に至り、到着後、存留通事（福州琉球館の存留役）の毛允恭が福防同知に漂流の「緣由」を報告している。そして船は修整を必要としていたことから、琉球館側の費用負擔による船の再修復を申し入れている。⁽²⁶⁾

この毛允恭の「開報」を受けた福防同知は詳文で漂流の「緣由」について福建布政使に報告し、花名（漂流者名）⁽²⁷⁾ 年歲・貨物の「清冊」を併せて提出している。そして漂流船の修船に関しては存公銀による修復を議請している。布政使はこの福防同知からの「詳文」と「清冊」を受けると、江蘇省や浙江省から送られてきた漂流民の撫恤（全任之等四十一名、照屋等十三名等の事例）を前例として参照し、山陽西表等三十六人の撫恤に関しては廣東で從優な「賚賞」が給發されていることから、福州では「加賞」の布・綿花・茶葉・麵・烟等を給發することをせず、撫恤は各自毎日「鹽菜銀」六釐・米一升の「折價銀」八釐七毫を給するに留め、そして歸國に際して一ヶ月の「行糧」を與えることを、花名年歲・貨物の「清冊」を附して「詳文」で閩浙總督・福建巡撫に報告している。「詳文」の中では他に存公銀の「動用」に関する皇帝への具奏および關係六部への報告を請い、さらにその「動用」については督撫による戸部への報銷が義務づけられていることから、漂流民の送還を待つて「冊」を作成して提出することを併せて傳えている。⁽²⁸⁾

總督と巡撫は布政使の「詳文」「清冊」を受理し察核した後、琉球館側から申し入れのあった船の再修復に関しては、存公銀を「動用」することなく琉球館の申し出の通り處理するよう指示し、そして「清冊」を禮部と戸部に咨送している。⁽²⁹⁾ また存公銀に関しては、支出額の定まった常例の項目以外の支出については具奏報告が義務づけられており、漂流民

に對する撫恤は常例の項目以外に屬していたことから、漂流民に給發する口糧米・鹽菜銀・行糧に關する存公銀の「動用」について巡撫が具奏報告している。⁽³⁰⁾この存公銀の「動用」に關する具奏については、山陽西表船が二度目の福州滞在中に、福建巡撫吳士功が提出した乾隆二十六年四月二十二日附けの奏摺が残っている。その中で山陽西表船の修船工料(五十兩)・口糧米・鹽菜銀・一ヶ月の行糧に關する撫恤銀兩について乾隆二十六年の存公銀を「動用」することを報告している。⁽³¹⁾

地方においては總督と巡撫が漂流民の撫恤・送還に關する行政的處理を統轄しており、布政使からの總督・巡撫への報告はこの督撫の「批示」で處理される。さて中央への報告であるが、山陽西表船の事例に示されているように乾隆二十四・五・六年の各漂着案件も禮部・戸部への「清冊」の咨送、皇帝への存公銀の「動用」に關する彙案具奏は巡撫がおこなっている。省における撫恤・送還に關する實務的な行政的處理はこのように巡撫によっておこなわれるケースが多い。

2 免稅措置に關わる文書

山陽西表船が南臺に到着した二日後の乾隆二十五年五月十三日、「委管南臺稅務遊擊」の任景から稟文で山陽西表船に裝載した皮箱・木匣・藥材・紙扇・線香・紙張・布疋・茶葉・紅糖等の貨物の征輸額(徵稅額)が一兩九錢三分八釐四毫一絲となり、舊例通りの免稅措置をとる伺いが福州將軍杜圖肯に對してなされている。⁽³²⁾任景からの報告をうけた福州將軍杜圖肯は、同年五月十七日附けで免稅措置の實施を具奏している。漂流船の裝載貨物に關しては進貢船・接貢船の附搭貨物同様、課稅されることなく免稅措置がとられるが、こうした免稅措置の多くが「閩海關」事務を兼務する福州將軍の監督下でおこなわれている。山陽西表船に關しては歸國に際しての免稅措置に關する文書の存在を現在のところ確認できないが、乾隆三十七(一七七二)年三月に福建省に漂着した翁長船(智汝沃等二十二入)に關しては歸國に際し、隨帶貨物・接貢船水梢の帶回貨物に對する四十二兩九錢五分六釐の徵稅が免ぜられ、その免稅措置に關する福州將軍の奏摺が乾隆三十

七年十一月三日附けで提出されていることから、⁽³³⁾山陽西表船の歸國に際しても同様の免稅措置がとられたものと考えられる。

乾隆二十五年五月十七日附けの福州將軍杜圖肯の奏摺では、免稅措置以外に山陽西表船の「遭風來閩」の情由が報告され、奏摺に花名年歳と貨物の「清冊」が附されている。この花名年歳・貨物の「清冊」に關しては、存留通事毛允恭が提出した以下の浙江省定海縣に漂着した糸數等九人（乾隆二十六年七月）の「清冊」が残っている。

琉球國遭風番人

糸數	年三十一歳	浙省に在りて糸數氣之と錯りて報せり
川田	年三十一歳	浙省に在りて川田氣之と錯りて報せり
島袋	年三十二歳	浙省に在りて瀨名波子と錯りて報せり
金城	年三十三歳	浙省に在りて座閒味子と錯りて報せり
糸數	年四十二歳	浙省に在りて石川仁也と錯りて報せり
新城	年三十三歳	浙省に在りて新城仁也と錯りて報せり
古堅	年三十六歳	浙省に在りて平息仁也と錯りて報せり
大城	年三十五歳	浙省に在りて用川仁也と錯りて報せり

以上九人は俱に琉球國中山泊村人に係る

隨帶物件

一 竹箱三個 内に舊衣服あり

- 一 水桶三個
 - 一 木箱一個 内に線香あり
 - 一 廢麻索四細
 - 一 木箱一個 内に篋梳五十把芋蔬十觔銅器一觔あり
 - 一 鐵鍋大小三口
 - 一 黑糖一甕 重さ三十觔なり
 - 一 木桶六個 俱に空なり
 - 一 烟葉一包 重さ十觔なり
 - 一 木匣六個 内に梳頭器具あり
- 以上共に十件なり⁽³⁴⁾

福建省以外での漂流民の取調べは漂流民に筆と紙を渡して筆談でおこなう「書訊」が一般的におこなわれていたが、その際特に花名にこの事例にみられるような「錯りて報せり」とする誤報のあるケースが多くみられる。その際福建省で花名を訂正する「更正」がおこなわれる。この糸數等の「更正」された清冊は浙江巡撫にも咨送されている。山陽西表船の花名年歳と貨物の「清冊」にもこのような「更正」があつたかどうかは明らかではないが、同時期に同一人物（存留通事毛允恭）によって作成されたものであるから、山陽西表等の「清冊」もこのような書式で作成されたものと思われる。

3 遣發回國（送還）に關わる文書

通常漂流民の歸國に際して、存留通事から福防同知へ歸國者の「清冊」と、進貢船または接貢船からの「引導駕駛」の

ための水梢二名の派遣及び船を安定させる底荷（バラスト）⁽³⁵⁾として壓載貨物の裝載許可を請う「稟文」が提出され、さらに「離驛登舟（福州琉球館へ柔遠驛を離れ乗船する）」の期日を報告される。福防同知は存留通事の要請および「離驛登舟」の期日を詳文で布政使に報告し、それを受けた布政使は前例を参照し一連の要請・報告に對處すべき處置を詳文で總督・巡撫に伝え、漂流民の撫恤・送還に關する琉球國王への咨文の給發と「遣發回國」の許可を請う。

山陽西表等三十五人、全任之等三十九人、照屋等十三人、大嶺筑登之青雲上等七人、嘉手川等三人、麻支宮良等四十五人等計百四十二人（人數の減少は病故によるもの）の送還に關しては新造船・山陽西表船の接貢船との「連縁回國」が決まり、全任之・照屋等の新造船では七月二十七日、山陽西表船では八月九日に歸國者全員の登舟を終えたことを、福建巡撫吳士功が乾隆二十五年八月二十四日附けの奏摺で報告している。⁽³⁶⁾しかし福州における「遣發回國」については中央の指示・許可を仰ぐ必要はなく、總督・巡撫の布政使から送られてきた詳文に批す「批示」で指示・命令が下されている。また同「批示」内で布政使に漂流船の「長行回國（出洋）」の期日を報告するよう命じている。乗船後、歸國者に福州清軍海防分府から護照が給發されているが、船が座礁し出洋に失敗して再び福州に回航したことから、その際に發給された護照は返却している。二度目の遣發回國の際に乾隆二十六年七月十四日附けで山陽西表等三十二人、廣東省香山から送られてきた漂流民二十六人等に對して給發された「護照」が『歴代實案』に残っている。⁽³⁷⁾「護照」には歸國者全員の人名及び漂流船に隨帶貨物・接貢船からの壓載貨物が裝載されていること、そして沿海の關津・汎口における查驗で出洋が遲滯することがないよう記されている。こうして給發された「護照」は次期の貢船での返却が義務づけられていた。

二度目の「遣發回國」に關しては、乾隆二十六年八月十九日附けで福州將軍杜圖肯から山陽西表船・黑嶋首里大屋子船二隻が、七月二十日に「關駕出口」したことが奏摺で報告されている。⁽³⁸⁾しかし同年九月に黑嶋首里大屋子等船は先に歸國していたが、山陽西表船が未歸國のため、琉球國王尙穆から「探問」の咨文（九月二十四日附）が「福建等處承宣布政使司」宛に出されている。⁽³⁹⁾それに對して布政使が琉球國王尙穆宛、督撫兩院に沿海各省への移咨を請い、並びに沿海各府縣

へ未歸國漂流民の「挨査」を命じたことを伝える咨文（乾隆二十七年十月三日附）を送っている。⁽⁴⁰⁾

この山陽西表船の探問に關しては、最終的に山陽西表船が乾隆二十六年十月に歸國したため、琉球國王尙穆から歸國を報告する謝咨（乾隆二十七年十月十五日附）が布政使司宛に出されている。⁽⁴¹⁾

三 送還システムの構造

1 漂流・漂着

清代乾隆期の琉球からの漂流船は、一八世紀初期以降王府の指導で中國式の戎克型の「馬艦船」が普及したこともあって、漂流船の多くがこうした二反帆以上の馬艦船である。馬艦船には多數の肋骨が組まれた水密甲板が附されているので、波をかぶってもすぐさま水浸しになる「水船」状態になる危険性はなく、また風上遡航も可能なことから波や風には強かったといわれているが、⁽⁴²⁾それでも多くの漂流船が中國沿岸に漂着している。漂流船は漁舟や琉球・薩摩間を往復する楷船の事例もあるが、山陽西表船のような琉球の島嶼間を往復する船隻の漂着事例が壓倒的に多い。琉球の漂流船については檔案では「梭子式雙桅小船」「馬駁船」「白槽船」といった船型名稱で出てくる。漂流船は洋上で暴風に遭い帆柱（樅）を折られ漂流する事例が多いが、強風にあおられての轉覆を防ぐため水主が帆柱を切ることもある。また船のバランスをとるため積荷を刎ね捨てる「刎荷」をするケースも少なくない。

琉球漂流民は中國沿岸海域での營船や漁船による救助や、漂着後上陸して漁戸や居民の救助を受けるといった事例が多い。この漂流民の救助に關しては官吏に對しては保護規制および撫恤義務が課されているが、一般人民にはそれは及ばない。一般人民は漂流民を保護しなくてもいいわけである。現に漂流民が「養贍」を拒否された事例や、乞食同様の物乞いをしたりした事例もある。よって漁戸や居民による保護を受け民家や廟宇に宿泊したりすることは、あくまでも救助者個

人の善意によるものであり、國家による撫恤・送還といった保護は營船・兵船による救助、または漁戸や居民が漂流民を縣衙門等に送り届けた後に、各省の撫恤規程に準じておこなわれる。

さて、山陽西表船は「長さ九丈、濶二丈、深さ一丈一尺」⁽⁴³⁾とあるから六・七反帆程度の中型の馬艦船かと思われる。山陽西表船の暴風による船の損壞のほどは不明であるが、王府への糧米交納後、購入した新桅・鐵釘・藥材・茶葉・鹽・糖等は過重な貨物でもなかったことから「刎荷」もせず、乾隆二十五年一月二日に廣東省潮陽縣に漂着している。漂着後間もなく營汛の救援を受け内港に牽入され、潮陽縣にて知縣より「口糧錢米」を給發されている。

2 譯 訊

上述したように山陽西表船は、中國が再び海禁政策にふみきり、薩摩側・王府側ともに隱蔽政策が強化された時期に廣東省潮陽縣に漂着している。津口手形を携帯していたはずであるが、福建巡撫の奏摺のなかでは「牌照無し」⁽⁴⁴⁾と記されていることから、漂流地の廣東省潮陽縣で津口手形を提示していないことが知れる。清代乾隆期の琉球漂流民の漂着時の状況について、乾隆二年八月に浙江省象山縣に漂着した新垣等十人に關する浙江布政司張若震の奏摺の中で「髪を蓄え、頂を剃る。衣は花布にして大袖、跣足にして篷首なり。漢音通ぜず」⁽⁴⁵⁾とある。漂流者のほとんどがこのように漢音に通じていなかったことから、漂流の經過について供述を取る際には筆談による「書訊」が知縣によっておこなわれている。

山陽西表等三十六人の漂着に關しては、廣東省からの要請を受け福建巡撫が布政使に夷語（琉球語）を解する土通事馮長藻の潮陽縣への派遣を命じている。浙江省や廣東省のように距離的に比較的福州に近い地域へ漂着した場合、このように土通事が漂着地に派遣されることがあった。こうした派遣については漂着した省の巡撫から福建巡撫に咨文で要請されるケースが多い。清代、福州には定額三名の土通事がおり、進貢使節の進京の際の伴送ならびに各衙門における夷語通譯および外省における漂流民の供述通譯等がその職務であった。⁽⁴⁶⁾こうした土通事を交えて供述をとることを「譯訊」とい

う。福建巡撫からも山陽西表等の福州到着を待つて布政使に「譯訊」の指示がでていたことから、山陽西表等は福州でも「譯訊」を受けている。福州での「譯訊」は通常福州同知が土通事を伴いおこなう。山陽西表等の譯訊については詳細を知ることはできないが、『呈稟文集』に収められている乾隆二年六月に浙江省定海縣に漂着し福州に護送された順天西表大屋子等三十六人の事例では、譯訊は琉球館でおこなわれ、土通事鄭任鐸以外に存留通事陳弘訓が共に通譯にあたっている。譯訊では漂流民が琉球人かどうかの最終確認、どういった積載貨物で琉球の何處の港を出航し目的地は何處だったのか、何年何月何日にどういった経過で漂流したのか、船上に軍器執照があるのか、浙江での供述と福州での供述は一致しているのかといったことが聴かれている。また人名年齢・隨帶貨物に関しては土通事と存留通事が逐次訊査して「清冊」を作成し、存留通事によって福州同知に提出されている。⁽⁴⁷⁾

3 修 船

山陽西表船は中國滞在中に三度船の修復をおこなっている。最初は廣東省潮陽縣に漂着した際に存公銀が給發され、船の修整および麻索と風帆の取り替え等をおこなっている。⁽⁴⁸⁾二度目は福州到着後で、福州での修復は損壞部分の修復ではなく歸國の航海に堪えうるような船の「修葺」と船具の「添補」であった。存留通事から福州同知に對して自費による修復要請がおこなわれ、それに對して福州同知が存公銀による修復を布政使に議請していたが、この修復に關しては上述したように存公銀を給發せず琉球館側の要請通り自費修復をおこなわせることが「批示」で命じられ、琉球館側による材料購入および修復がおこなわれている。⁽⁴⁹⁾三度目の修船は浙江省温州中營三盤洋面から出洋後に暴風に遭い座礁し船底が「溢漏」したことから、福州に回航しておこなわれた修復である。この修復については福建巡撫吳士功から存公銀の「動用」に關する奏摺が乾隆二十六年四月二十二日附けで提出されており、その中で五十兩を撥給して琉球館に自ら資材を購入させ修復させること、そしてその修復には乾隆二十六年の存公銀をあててることを報告している。⁽⁵⁰⁾

漂流船の修復に關しては乾隆二年閏九月十五日の上諭で「漂泊の船有らば、該督撫に著して有司を率し、加意撫恤し、存公の銀兩を動用し、衣糧を賞給し、舟楫を修理し、並びに貨物を將て查還し、本國に歸還せしめ、以て朕が遠人を懷柔するの至意を示すべし⁽⁵¹⁾」とあり、修船に對する「存公銀」の支出が認められていたが、山陽西表船の事例にみられるように必ずしも全ての修船に對して存公銀が撥給されたわけではない。

乾隆三十五（一七七〇）年七月に浙江省象山縣に漂着した大城船（高嶺筑登之親雲上等二十七人）の事例では、補強のための自費「修葺」の際に福防同知に「料單」の給發を請い、その給發を待つて修船をおこなっている。⁽⁵²⁾修船に關しては勝手な修復は許されず、また福州における滞在期間との關わりもあり福防同知への報告が義務づけられ、その管理下でおこなわれている。さらに修復にあたつては福州の船大工が雇われることもあったが、乾隆三十七年三月に福建省に漂着した翁長船（智汝沃等二十二⁽⁵³⁾人）のように球匠（琉球人船大工）によっておこなわれることもあった。なお、存公銀の「動用」による修船があつた場合、修船の工料は工部の管轄下で處理されたことから、報銷は工部に對しておこなわれた。また前述の全任之船・照屋船のような存公銀二二〇兩を支出し原船を解體して新たに海船一隻を仕立てる「折造新船」といった事例は、管見の限り清代を通じてこの一件のみで修船の撫恤措置としては定着していない。

4 變 賣

漂流船による交易行爲は許されていなかったが、壞船や搭載貨物を中國で賣却し換金化して持ち歸ることは撫恤の一環として許可されていた。その貨物を賣却することを「變賣」といい、『寶案』や『檔案』では、その他に「變價」「變邑」「變售」が同義語として出てくる。漂着地では漂流民の意思によつて變賣が決められ「就地變賣」「就地變價」、福州では琉球館側が變賣に關與し琉球館内で變賣が行なわれた場合「就館變賣」「在館變賣」「在館變價」という用語が用いられている。變賣の對象となつた隨帶貨物は米、粟、綿花、鹽、茶、烟草等であるが、壞船以外にも損壞していない堅

固な漂流船でも二・三反帆の狭小な小型の船隻は遠途航海に堪えられないとの理由で變賣されることもあった。また咸豐二年五月に山東省海陽縣に漂着した張石嶺等六人は衝礁損壞した漂流船の船板や桅枝にすがり漂着しているが、その船板や桅枝まで變賣の對象になっており、張石嶺等は變價銀五兩七錢一分四釐を收領している。⁽⁵⁴⁾

漂流船及びその隨帶貨物はたとえ船が座礁し沈失・漂散したものであっても賣却できるものは變賣された。沿海の住民がそれを勝手に撈獲して持ち歸ると「洋人の財物の奪搶行爲」とみなされ處罰の對象となるケースもある。乾隆五十一年八月に福建省長樂縣に漂着し座礁した當間等二十五人の案件では船板や米を撈獲して持ち去った居民二十二人が拏獲され「杖一百流二千里」「杖一百徒三年」等の刑罰を受けている。⁽⁵⁵⁾

漂流者の隨帶貨物は驗明後、沒收されることはなく漂流民に「發還」されるが、中國からの持ち出しが禁止されていた違禁物品は、たとえ漂流民が隨帶貨物として持ち込んだものであっても帶回歸國が許されることはなく、中國國內における變賣が強制的におこなわれた。乾隆三十五年七月に浙江省太平縣に漂着した嘉數船（俞崇道等十九人）では隨帶貨物の銅鐵・鐵鍋が、また乾隆五十八年七月に鎮海縣に漂着した比嘉船（比嘉等九人）では牛角二個（變價錢二〇文）が強制的に變賣させられている。⁽⁵⁶⁾ 通常、變賣は漂流民もしくは琉球館側の要請でおこなわれたが、全てが要請通りに變賣できるわけでもなかった。嘉慶十六年に福州府閩安鎮に漂着した漁民大城等八人の「連縛獨木小船」四隻に關しては、琉球館側から變賣の要請が出ていたが、變賣できず三隻は焼化處分され、残る一隻は接貢船で帶回している。⁽⁵⁷⁾

さて變賣の方法であるが、撫恤の一環として漂着地では知縣が漂流者に代わっておこなうケースが多い。福州でおこなわれる場合は琉球館の存留通事が關與し、漂流者の意志による勝手な賣却は許されない。乾隆五十一年十月に福建省長樂縣に漂着した與那國船（登里城等十九人）の事例では、漂流船の損壞がひどく「柴料」として解體し變賣されることになり、存留通事鄭章觀、土通事鄭煌・馮陞、地保吳志春の立ち會いのもとで「承買人」姜艾觀・鄭佳佳に十六兩で賣却され、存留通事鄭章觀から「領狀甘結」、土通事・承買人の「甘結」が福防同知に提出されている。⁽⁵⁸⁾ また山陽西表船のよう

に隨帶貨物を漂着地で變賣せず、福州まで運び帶回歸國する事例も少なくない。山陽西表船と同時期の漂流船では廣東省香山縣に漂着した麻支宮良船、大城船が船の「就地變賣」をしている。⁽⁵⁹⁾

5 護 送

山陽西表船は潮陽縣に約三ヶ月滞在した後、乾隆二十五年四月五日に營船に護送されて福州に向け潮陽縣を出航し、五月六日に福建閩江の亭頭に到着している。漂流者は漂着後、通常漂流船が航海に堪えうると判断されると山陽西表船のように營船を派撥して福建まで護送される。原船を漂失したり變賣したりした際は雇船で水路を選ぶ場合もあるが、陸路での福州護送のケースが多い。嘉慶十五年七月に江蘇省に漂着した日本人の漂流船は薩州に漂着した琉球人漂流民大城之親雲上を附搭した稀な例であるが、日本人漂流者二十六人は浙江省の乍浦へ、大城之親雲上は陸路福州へ護送されるといふ、同一船による漂着に關しても國別による分別護送がおこなわれている。⁽⁶⁰⁾ 琉球漂流民の送還に關しては、漂着地から福州への護送そして福州からの歸國が送還體制の中でシステム化されており、それに準じて處理されていた。また漂流民側においても進貢貿易が展開されている福州へ行けば歸國できるといふことは共通に認識されており、福州への護送を懇求するケースが多い。⁽⁶¹⁾

總督・巡撫は「遭風難民」漂着の一報を受けると直ちに布政使に撫恤を命じる。沿途各縣、沿海水師各營には漂流者の「接護」の指示が出され、水路や漂流船の護送においては沿海の各營縣を経由し口糧銀米の給發を受けながら福州に送り届けられ、陸路のコースでは驛站や公所が利用されるケースが多い。また臺灣への漂着民については、乾隆十一年一月に彰化縣に漂着した多良間親雲上等四十人が臺防廳に送られ商船に託されて廈門に護送されたように、臺灣からの護送は清代初期に南部の鹿耳門から廈門のみの送還ルートに限定されていたが、乾隆後期以降特に嘉慶期に入ると北部の八里坌や艋舺から蚶江（福建省莆田縣の外港）に護送され、陸路で福州に向かうケースも増える。途中病故者が出ると、福州まで

「屍棺」を運び埋葬した例外的な措置も散見するが、現地で棺衾を賜い埋葬標記されるのが通例であった。山陽西表船では廣東と福建で病故者を出し、棺衾を賜い現地で埋葬されている。⁽⁶³⁾

6 撫恤銀兩と賞資品目

漂流民に對する撫恤は沿海各省の地方官によっておこなわれたが、地方で撫恤を統轄するのは上述したように總督・巡撫であった。停泊中の撫恤に關して、山東省で各自一日口糧銀五分、江南省で口糧米一升・鹽菜銀六釐、浙江省で口糧米一升・鹽菜銀三分、福建省で口糧米一升・鹽菜銀六釐、廣東省で口糧米一升・鹽菜銀一分と規定され、均一化されたものはなかった。⁽⁶⁴⁾ それ以外に各省で衣類や必需品が「賞給」されている。『戸部則例』には浙江省での支給規程が詳細に示されており、それには春秋に綿布衫一件・綿布袴一條、夏に苧布衫一件・苧布袴一條、冬に氈帽一頂或いは裹頭布、綿襖一件、綿袴一條、嚴冬には綿氅衣一件・綿鞋一雙とある。⁽⁶⁵⁾ しかしこうした「賞給」は必要に應じてなされるもので、必ずしもその規程に準じて全て支給されるものではなかった。福建省に關しては『戸部則例』で、停泊の日に各自毎日「口糧米」一升、「鹽菜銀」六釐、歸國に際して「行糧」一ヶ月、さらに「加賞」として布四疋、綿花四斤、茶葉・生烟・灰麵各一斤、四十人毎に猪二口、羊二牽、酒二埕、四十人に満たない場合は猪一口、羊一牽、酒一埕、人數が少ない場合、各自猪肉・羊肉・酒各四斤と規定されている。⁽⁶⁶⁾ 『則例』で「停泊の日」とあるのは漂流民が福州琉球館に到着安頓する「安挿之日」を指す。漂流者が小人數の場合、猪肉・羊肉・酒が各四斤と規定されるようになるのは乾隆十五年が初見で、臺灣に漂着した慶留間等漂流民は四人と人數が少なかったことから布政使から巡撫・總督へ減額の要請が出ている。⁽⁶⁷⁾ 福建における定例化の過程はこうした撫恤處理が前例として成例化したものが多く、明代の撫恤を大方繼承し『戸部則例』に規定されているように定例化するのは乾隆期である。なお、布・綿花・茶葉・生烟・灰麵・猪・羊・酒等の「加賞」は、乾隆二十二年に浙江省寧海縣に漂着した山城等五人に對して浙江省で各自綿被一張・綿襖一件・衫一件・袴一件といった十

分な賞資品の「賞給」がなされていたことから、福建省では給發されていない⁽⁶⁸⁾。これが前例となり、乾隆二十四年の全任之・照屋等の撫恤に關しては布政使から總督・巡撫に「加賞」の停止を請う詳文が提出され、以後福建省においては他省で賞資品が「賞給」されていない場合或いは十分な「賞給」がなされていないと判斷された以外は、原則として「加賞」はおこなわないということが定例化している⁽⁶⁹⁾。山陽西表等も廣東でそうした賞資品の「賞給」を受けていたことから福建での「加賞」は給發されていない。

また乾隆三十七年十月に臺灣から福州に護送されてきた當閑仁也等百十四人の漂流者の中には「番童」「番女乳子」が含まれていたが、この百十四人といった清代最も多い琉球漂流民の撫恤は財政的な負擔も重く、幼兒に對する撫恤に關して布政使から總督・巡撫に大人の「折半(半分)」を給與することが提議され、その通りに處理されている⁽⁷⁰⁾。福建における口糧米・行糧・加賞等は「折價銀」で給されることも多く、その際米一升は「折價銀」八釐七毫に換算され、⁽⁷¹⁾「加賞」についても折價規定が詳細に決められている。山陽西表等に對してもこの「折價銀」で支給されている。『戸部則例』には山東省・江南省・浙江省・福建省・廣東省における護送中の口糧米等の撫恤に對する規定はないが、福建省から赴京回國する朝鮮國漂流民の撫恤口糧米に關して「每名日に米捌合參勺を給す⁽⁷²⁾」とあることから移動中の撫恤は「停泊の日」とは異なっていたことがわかる。なお、こうした撫恤は中國への外國人漂流民全體に及ぶもので琉球漂流民のみが享受したわけではない。

7 送 還

清代の琉球漂流民の送還に關しては、乾隆二十五年の送還事例のような漂着船や接貢船による送還以外に、進貢船・護送船・謝恩船・進香船・租雇商船による送還がおこなわれている。

山陽西表船は修船終了後、山陽西表等の隨帶貨物以外に接貢船からの壓載貨物が接貢船貨物の清冊から外され積み込ま

れ、八月九日には歸國者全員の「登舟」を終え歸國の體勢を整えている。⁽⁷³⁾乾隆二十六年七月に浙江省平湖縣に漂着した大灣船のように漂流民が、碗・糖・線香等の粗重貨物を購入し壓載貨物として裝載して歸國した事例があるが、⁽⁷⁴⁾これは極めて特殊な事例で、こうした漂流民が粗重貨物を購入する事例は以後送還の際の前例として定着せず、漂流に乗じた交易行為は固く禁じられている。山陽西表船には山陽西表等三十五人以外に廣東省香山縣から護送されてきた麻支宮良等四十六人内の二十八人と「引導回國役」二人が乗り込んでゐる。通常こうした歸國者の配船及び隨帶貨物・壓載貨物の裝載に關しては、存留通事によつて福防同知に清冊を添えて稟文での伺いがなされ、福防同知が布政使に對處すべき措置を詳文で提議し、さらに布政使が送還に關する前例を参照して總督・巡撫にその措置を報告して處理される。撫恤の一環としておこなわれていた漂流民に對する口糧米・鹽菜銀の給發は琉球館到着の「安挿の日」からはじまり「登舟の日」で打ち切られる。漂流民には「登舟」に際して一ヶ月の行糧が與えられるが、乾隆二十四年に江蘇省崇明縣に漂着した知太峯等五人に對する行糧の内譯が每人口糧米三斗・鹽菜銀一錢八分とされていることから、⁽⁷⁵⁾行糧は滯在中に支給された口糧米と鹽菜銀の一ヶ月分に相應するものであったことがわかるが、この行糧は撫恤の一環で漂流民のみに支給され、「引導回國役」には支給されない。⁽⁷⁶⁾

山陽西表等では前進貢京回都通事張能勝と前接貢水梢安次嶺の二人が「引導回國役」の任務を帯びて乗船しているが、清代を通じて送還に關する報告文書の中では「引導回國役」として進貢或いは接貢船の「水梢二人」の名が記されている例が多い。「水梢」の中の一人は「讀書習禮」を目的とし、それと平行して地理・曆法・冊封禮法・大清律例・醫學・産業技術等の習得・學習をしていた「勤學人」であつた。⁽⁷⁷⁾福州滯在中は存留通事が地方官衙との接觸をしていたが、登舟後はこうした中國側には「水梢」（或いは相伴）と稱して福州に滯在していた「勤學人」が通事の任務をおびている。山陽西表船では前進貢京回都通事の張能勝がこの通事の任務を擔つてゐる。八月九日に登舟を終えた山陽西表船は、總督・巡撫の「遣發回國」の批示を得て、八月二十七日に閩安鎮で附搭人員・貨物の驗明を受け、その後兵船に護送されて浙江省

温州中營三盤洋面まで北上し風待ちをして、十一月十七日に全任之・照屋等の新造船と共に出洋するまでに實に三ヶ月以上の日時を費やしている。その間の地方官衙及び護送する兵船等との一切の接觸は乗船通事を介しておこなわれている。

總督・巡撫の遣發回國の批示が出ると、布政使は琉球國王宛の漂流民の撫恤・送還の経緯を示す咨文を歸國船に託すが、これに對して琉球國王からは歸國の報告と撫恤への謝意を示す謝咨を送ることが送還體制における文書の收發システムの中で定例化していた。この文書が届かず前述の山陽西表船の事例のように探問の咨文が届けられると、布政使は即ち巡撫・總督にその旨報告し、巡撫・總督は沿海各省の督撫兩院へ移咨し山陽西表船の再漂着に關する確認をとる。そして沿海各府縣へは漂流民の「挨査」が命じられる。最終的に山陽西表船に關しては、乾隆二十七年十月十五日附けで琉球國王尙穆から山陽西表等が前年十月に歸國したことを報ずる謝咨が、乾隆二十七年の進貢正使馬國器・副使梁煥に託され福建布政使司に届けられている。この琉球國王からの咨覆は福建における一連の送還處理の終了を意味した。

結 論

清代の琉球漂流民に對する撫恤及び送還方法は明代の送還システムを繼承し、國家的な保護として前述したように種々漂流の撫恤處理を積み重ねる中で體系的に整備されている。

乾隆二年の上諭は琉球漂流民のみならず、外國人漂流民全體に對する清朝の撫恤措置の先例となるものであったが、その中で撫恤に存公銀の使用を認められたことから、地方では「恩賞備公款」の項目で撫恤銀兩を支出している。そうした財源の確保は送還體制システムを確立させる契機となり、嘉慶以降の『實錄』の内容が全て「琉球國遭風難夷を撫卹(恤)すること例の如し」⁽⁷⁸⁾と簡記されていることから知られるように、乾隆期にかなり定例化した送還システムの整備がなされている。

漂流民に對する實質的な撫恤・送還は地方官レベルでおこなわれていたが、特にこの乾隆二年の上諭以降、送還體制は

國家的な保護・管理の下で體系的なシステム整備が進んでいる。

本稿で取り上げた山陽西表船の漂着事例はそうした整備が進められている過渡期の事例で、例えば文書の收發過程でみると、乾隆二十四年九月二十四日附けで浙江省台州府臨海縣から全任之等四十一人の撫恤を通知し琉球國王に歸國期日の咨覆を請う咨文が送られているが、こうした文書の發送は送還システムの文書收發過程で定例化されていない。また山陽西表船の「護送來聞」の情由に關して福州將軍杜圖肯が花名年歲・貨物の「清冊」を附して具奏しているが、以後福州將軍は免稅措置の具奏、こうした安頓撫恤の事宜は督撫衙門が統轄具奏することで定例化されるようになる。この時期の行政文書の收發システムに關してはまだ體系的な確立はみないが、送還體制下の撫恤の内容および指示系統に關しては、その後の嘉慶・道光とほぼ差異はないことから、かなり基盤的な整備が整いつつある時期であったといえよう。

漂流はほとんどが暴風といった突發的な自然現象で引き起こされるが、島嶼國家である琉球では島嶼間を多くの「町船」や「地船」が往復しており、漂流による中國への漂着は當然豫測できることであり、薩摩藩の琉球支配に絡む隱蔽政策の種々令達とあいまって、王府はその對應にも苦慮していた。山陽西表船の漂着は、そうした複雑な琉球の歴史的背景を象徴する事例でもある。

清代の琉球漂流民送還體制については、福建布政使司から各漂流民の撫恤に關して送られてくる咨文や、處理にあたつた存留通事や漂流民のもたらす情報で、王府はそのシステム體系を詳細に把握している。そうした情報は王府の中樞に留まることなく、存留通事が携帯していた進貢・漂流等の公務處理に關する文例集『呈稟文集』の存在、そして中國漂着時における食糧補給・修船・治療・病故埋葬・福州への護送といった緊急に對處しなければならぬ届書や願書の書式文例集『漢文』⁽⁸⁰⁾を八重山下級士族が所持していたことなどからも知れるように、琉球漂流民の送還システムについては廣く琉球側に認識されていたものと考えられる。

註

- (1) 西里書行「清代光緒年間の『琉球國難民』漂着事件について」(『第二回琉球・中國交渉史に関するシンポジウム論文集』沖縄県立圖書館、一九九五年) 八九頁。
- (2) 琉球漂流民に関する檔案に關しては中國第一歷史檔案館編『清代中琉關係檔案選編』(一九九三年)、『清代中琉關係檔案續編』(一九九四年)、『清代中琉關係檔案三編』(一九九六年)が刊行されている。『清代中琉關係檔案選編』には宮中硃批奏摺・軍機處錄副奏摺が、『清代中琉關係檔案續編』には内閣題本が、『清代中琉關係檔案三編』には禮部・戶部・兵部等から稽察房への移會等の檔案史料が收録されている。こうした檔案類を利用した琉球漂流民に関する研究は西里書行氏の論文以外に、朱淑媛「清代琉球國難民救助考」(『歴代實案研究』六・七合併號、一九九六年三月)と楊彥杰「清代臺灣撫恤琉球遭風難民的案例分析」(『第七屆中琉歷史關係國際學術會議論文集』一九九九年十二月刊行豫定)等がある。また清代の琉球漂流民送還體制の全體像を概観しうる論考として渡邊美季「清代中國における漂着民の處置と琉球」(未刊)がある。
- (3) 荒野泰典『近世日本と東アジア』(東京大學出版會、一九八八年) 一四八頁。
- (4) 『中山世譜』(『琉球史料叢書』第四、井上書房、一九六二年) 一〇七～八頁。
- (5) 『歴代實案』(沖縄縣立圖書館史料編集室校訂本(以下校訂本と略す)、一九九二年) 第一冊、五九一頁。
- (6) 同右、二六七頁、六四五頁。
- (7) 東大東洋文化研究所藏「欽定戸部則例」(江蘇省布政司衙門藏版、乾隆四十八年刊) 卷二百十五、蠲卹。
- (8) 『歴代實案』(校訂本、一九九三年) 第三冊、四五六～七頁。
- (9) 『歴代實案』(校訂本、一九九三年) 第四冊、九頁。
- (10) 『清代中琉關係檔案選編』一～二頁。
- (11) 『乾隆朝上諭檔』(中國第一歷史檔案館、一九九一年) 二二頁。臺北故宮博物院收藏「乾隆朝起居註冊」乾隆二年閏九月十五日。
- (12) 「薩州船清國漂流談」(『江戸漂流記總集』第一卷、日本評論社、一九九二年) 二〇九～一二頁。
- (13) 同右、二二頁。相田洋「近世漂流民と中國」(『福岡教育大學紀要』第三一號、一九八一年) 参照。
- (14) 紙屋敦之『幕藩制國家の琉球支配』(校倉書房、一九九〇年) 二六二頁。
- (15) 沖縄縣立圖書館收藏「旅行心得之條々」。
- (16) 「唐漂着船心得」(『那覇市史資料編』資料篇第一卷の二、一九七〇年、六～七頁)。
- (17) 小林茂文「漂流と日本人」(『漂流と漂着・總索引』小學館、一九九三年) 一四三頁。
- (18) 『清代中琉關係檔案續編』四六一頁、四七八頁。『清代中琉關係檔案選編』七二～三頁。『歴代實案』(臺灣大學本(以下臺大本と略す)、一九七二年) 第五冊、二九九四頁。

- (19) 『清代中琉關係檔案續編』四七五～七頁。『清代中琉關係檔案選編』六七頁、七三頁。
- (20) 『清代中琉關係檔案續編』四七七頁。『歷代寶案』（臺大本）第五冊、二九八九～二九九〇頁。『中山世譜』一五〇頁。
- (21) 『清代中琉關係檔案續編』四六〇～一頁、四七八～九頁。『清代中琉關係檔案選編』七五頁。
- (22) 『清代中琉關係檔案續編』四八二～三頁。『清代中琉關係檔案選編』八二頁。
- (23) 『清代中琉關係檔案續編』四九〇頁。『清代中琉關係檔案選編』八二～五頁。『歷代寶案』（臺大本）第五冊、三〇一九頁。
- (24) 『歷代寶案』（臺大本）第五冊、三〇七二頁。
- (25) 『清代中琉關係檔案選編』七二頁。
- (26) 『清代中琉關係檔案選編』七二～三頁。『歷代寶案』（臺大本）第五冊、二九九四頁。
- (27) 『清代中琉關係檔案續編』四八〇～一頁。『歷代寶案』（臺大本）第五冊、二九九四頁。
- (28) 『歷代寶案』（臺大本）第五冊、二九九四～五頁。
- (29) 同右。『清代中琉關係檔案續編』四七八頁、四八〇～一頁。
- (30) 『清代中琉關係檔案選編』八二頁。
- (31) 同右。
- (32) 『清代中琉關係檔案選編』七三頁。
- (33) 『清代中琉關係檔案選編』一四六頁。
- (34) 臺北故宮博物院收藏「軍機處錄副奏摺」登錄總號〇〇〇一七五。
- (35) 壓載貨物は進貢船・接貢船等から派撥される「引導回國役」の水梘等が福州における開館貿易で置買した貨物という名義で漂流船に搬入される。道光七年の糸數等（十三人）の漂流船には壓載貨物として「茯苓・桂皮・甘草・大黃・茶葉・蘇木・雨傘・粗碗・盤碟・茶酒杯」等が搬入されている（『歷代寶案』（臺大本）第十冊、六〇三〇頁）。
- (36) 『清代中琉關係檔案選編』七九～八〇頁。
- (37) 『歷代寶案』（臺大本）第五冊、三〇一二～三頁。
- (38) 『清代中琉關係檔案選編』八五頁。
- (39) 『歷代寶案』（臺大本）第五冊、三〇一九～二〇頁。
- (40) 同右、三〇二七頁。
- (41) 同右、三〇七二頁。
- (42) 池野茂『琉球山原船水運の展開』（ロマン書房、一九九四年）一二五頁。
- (43) 『歷代寶案』（臺大本）第五冊、二九九四頁。
- (44) 同右。
- (45) 『清代中琉關係檔案選編』一頁。
- (46) 『福建省例』（臺灣文獻叢刊一九九種、臺灣銀行經濟研究室、一九六四年）第八冊、一〇八八～九頁。『歷代寶案』（臺大本）第九冊、五二一四頁。
- (47) 沖繩縣立博物館收藏『呈稟文集』は道光六年に存留通事として福州に航した梁必達が携帯していたとされる進貢・漂流等の公務處理に關する官衙へ提出した文書の漢文文例集。中

國第一檔案館收藏「禮科史書」(福建巡撫趙國麟題本、雍正八年十二月十九日附)に佐和田等十八人に對する譯訊の事例が記されているが、譯訊は土通事鄭任鐸と存留通事金鼎が會同しておこなっている。

- (48) 『歴代寶案』(臺大本)第五冊、二九九四頁。
- (49) 『清代中琉關係檔案續編』四八〇～一頁。
- (50) 『清代中琉關係檔案選編』八二頁。
- (51) 前掲『乾隆朝上諭檔』、二三二頁。
- (52) 『歴代寶案』(臺大本)第六冊、三三九一頁。
- (53) 同右、三三〇八頁。
- (54) 『歴代寶案』(臺大本)第十四冊、八〇一～二頁。
- (55) 『清代中琉關係檔案三編』(乾隆五十一年十一月二十一日附、兵部から稽察房への移會)一九五頁。『歴代寶案』(臺大本)第六冊、三六八三～九〇頁。
- (56) 『清代中琉關係檔案選編』一三一頁。『歴代寶案』(臺大本)第七冊、四〇〇三頁。
- (57) 『清代中琉關係檔案選編』四四五～六頁。『中山世譜』二〇四頁。
- (58) 『歴代寶案』(臺大本)第七冊、三七八三～四頁。
- (59) 『清代中琉關係檔案選編』七五頁、八四頁。
- (60) 『清代中琉關係檔案選編』四二一～二頁。
- (61) 石垣市立八重山博物館收藏「竹原家文書」。
- (62) 『清代中琉關係檔案選編』一五頁。
- (63) 『歴代寶案』(臺大本)第五冊、二九九四頁、三〇〇二頁。

頁。

- (64) 前掲『欽定戸部則例』卷一百十五、鐫卹。
- (65) 同右。
- (66) 同右。
- (67) 『歴代寶案』(臺大本)第五冊、二五八六頁。
- (68) 同右、二八九九頁、『清代中琉關係檔案續編』四七六頁。
- (69) 同右、二九九四～五頁。
- (70) 『清代中琉關係檔案選編』一四七～八頁。『歴代寶案』(臺大本)第六冊、三三一八頁。
- (71) 『清代中琉關係檔案續編』四七八頁。
- (72) 前掲『欽定戸部則例』卷一百十五、鐫卹。
- (73) 『清代中琉關係檔案續編』四八二頁。
- (74) 『歴代寶案』(臺大本)第五冊、三〇三八頁。
- (75) 『清代中琉關係檔案續編』四三五頁。
- (76) 『歴代寶案』(臺大本)第六冊、三三〇〇頁。
- (77) 深澤秋人「琉球使節における勤學人」、『栃木史學』第十二號、一九九八年三月、六八～九頁。
- (78) 『仁宗實錄』卷四、嘉慶元年四月己丑。
- (79) 『歴代寶案』(臺大本)第五冊、二九九八頁。
- (80) 『漢文』には届書や願書の書式を漢文で示した文例に續けて、王府が令達した「旅行心得之條々」の回答の漢文譯を載せている(竹原孫恭『城間船中國漂流顛末』一九八二年、二一四頁)。

Kooli Jai which is a part of the Manchu translation of the *Jin-shi* 金史 (History of the Jin Dynasty). And the other, titled *Nenehe GENGGI-YEN Han i Sain Yabuha Kooli Uheri Juwan Nadan Debtelin* (the good deeds of the former brilliant khan, in totally seventeen articles), contains the documents about the legend of the Qing founding and the Ninggun Mafa 六祖, the six ancestors of the Qing dynasty, as well as the records of Nurhaci (the founder of Aisin Gurun and the first khan of the Qing) by the year of 1584 in the pre-khan era. It corresponds to chapter (juan) 1 and the first article of chapter 2 of the *Manzhou-shilu* 滿洲實錄.

This paper examines the latter archives, which was dated to the years of Tiancong 天聰 (from 1627 to the eleventh day of the fourth month of 1636) in previous studies, and concludes that it should be dated to the years of Chongde 崇德 (from the twelfth day of the fourth month of 1636 to 1643). In this Manchu archives, we can find the new details of Ninggun Mafa, Nurhaci and other historical events in the Nurhaci's pre-khan era which have never been known before. So according to this entirely new knowledge, the early Qing history, especially in the Nurhaci's pre-khan period can be reconstructed more completely.

RYUKYU REFUGEE REPATRIATION SYSTEM OF THE QING DYNASTY—A CASE STUDY OF THE “SANYOU IRIOMOTE SEN” SHIPWRECK IN 1760—

AKAMINE Mamoru

The shipwrecked Ryukyu refugee repatriation system of the Qing dynasty was fundamentally based on that of the Ming dynasty, and was further developed into a structured national security system.

Almost all the provinces along the coast of China encountered the incidences that shipwrecked Ryukyu refugees drifted ashore. Among these provinces, Zhe-jiang 浙江 and Fu-jian 福建 received the largest number of Ryukyu refugees; and next to them were Jiang-su 江蘇, Shan-dong 山東 and Guang-dong 廣東.

A ship called “Sanyou Iriomote Sen” drifted on to the shore of Guang-

dong province in January of the 25 th year of Qian-long 乾隆. Among the records documenting the accommodation and repatriation system in the Qing dynasty, the ones concerning the “Sanyou Iriomote” Sen are the most detailed.

This essay investigates the repatriation and consolation system of Ryukyu refugee under the Qing dynasty by referring to the “Sanyou Iriomote Sen” shipwreck and other cases of consoling drifting ships in the same period. It particularly examines the content of this system and the related administrative documentation and distribution processes during the Qian-long Era.

**THE CHAIYAO 差徭 AND QING-MIAO HUI 青苗會 IN
THE NORTHERN CHINA DURING THE QING: A CASE
OF SHUN-TIAN FU 順天府, BAO-DI XIAN 寶坻縣 SINCE
THE YEARS OF JIAQING 嘉慶**

ODA Noriko

It was the common practice that local governments collected taxes from the peasants in rural society under the name of the duty of long distance relay in case of budget shortage in the northern China. The expenses, levied from rural society due to budget shortage were called chaiyao. Chaiyao was an important source for local budget which was unflexible, but from the peasant's standpoint, it was a serious pressure on them as it was levied irregularly as the local government's pleases.

To cope with the heavy payment of chaiyao, the peasants joined the rural organizations like che hui 車會 and qing-miao hui. Before the years of Jiaqing and Daoguang 道光, leading members in the village paid the expenses assigned by local governments. Under this way of levying chaiyao, they formed che hui in order to collect the chaiyao money. In the years of Tonzhi 同治, the way of levying chaiyao on a land basis became common in rural society. The chaiyao money was collected as part of the qing-miao money, and became part of the activities of qing-miao hui. The increase of chaiyao which had been started clearly from the Jiaqing years brought